

園番号 715

令和6年度 奈良市立平城こども園 研究実践概要

園長名 小川原 由美子
全園児数 107名

1. 研究主題

自分らしさを発揮し、生き生きと活動する子どもを目指して
～「やってみよう！」があふれる環境づくり～

2. 研究年度

2年目

3. 研究主題設定理由

本園の子ども達は、人懐っこく素直で真面目な子どもも多いが、新しいことへの取り組みや失敗に弱く、友達よりも大人とのかかわりを好み、依頼心の強さも感じられる。昨年は保育者が意図して設定した活動を多く取り入れたことで子どもが体を動かすことが好きになってきたが、体の使い方にぎこちなさが見られる。今年度は子どもが主体的に遊ぶ中でいろいろな体の使い方ができるような環境構成の在り方を探っていきたいと考え、主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

ひと・もの・こととのかかわりの中で、自分らしさを発揮しながら遊ぶ子どもの育ちを見取り、多様な動きを取り入れられるような環境構成を探る。

②研究の重点

- 遊びや生活の中で子どもの動きに着目し個々につけていきたい力を捉え、多様な動きを取り入れられるような環境構成を探る。
- 安心できる環境のもと自己表現・自己発揮できるように職員相互で子ども理解を深め、一人一人に応じた援助ができるようにする。
- 意欲が高まったと思われる要因や、やってみようとする心の動きを探り、子どもが主体的に遊べる保育内容の充実に努める。

③活動の方法

各学年の実践事例を挙げ、遊びや活動の中で生き生きと活動する子どもの姿を以下のように示し、子どもが環境にどのようにかかわり、どのような心や体の育ちがあったのか分析した。

生き生きと活動している子どもの姿

援助と環境構成

心の動き

体の育ち

【事例1】 「次は一人でやってみる」(3歳児9月)

うんていを行き来する4・5歳児の様子を見ていたA児。そこで自分もやってみようとして挑戦するが、ぶら下がることができても次に進むことができない。すると、隣で見ていた保育者に「持つといってもらったらいけると思うねん」と話したため、保

異年齢児の様子を見て、自分もやってみたい。

保育者が手伝うことにした。少しドキドキした様子でうんていに手をかけると、「いくで」と保育者に合図をしてからぶら下がるA児。保育者が少し体を支えると、「よいしょ！よいしょ！」と最後までやり切ることができた。「やったね、できたよ！」と保育者がA児に声を掛けると、笑顔ではあるがどこか納得していない表情だった。すると、A児が「次は一人でやってみる」と話す。保育者は「分かった。応援してるね」と傍でA児の頑張りを見守ることにした。「手が痛くなってきた」と言いながらも何度も挑戦しようとするA児に、保育者は「がんばれ」「あとちょっとだ」と絶えず声を掛け続けた。その後、A児は手を離して次の棒をつかむことができ、「先生、できた！」と保育者と共にとびきりの笑顔で喜んだ。

保育者の助けを借り、片手を離して前に手を出し、次の棒をつかむなど、うんていのやり方を体感する。

支えてもらわないで、一人で挑戦してみたい。



繰り返し挑戦することで、体を前後に揺るなど体の使い方を知る。

<考察>

- ・異年齢児から刺激を受け、自分でやってみようとするが、体の使い方が分からずうまくいかなかった。保育者が援助したことにより、前に進むための体の使い方を知ることができた。
- ・「一人でやってみる」と言ったA児の思いに保育者が寄り添い隣で見守ったことで、安心して何度も挑戦する姿につながった。保育者に認められ褒められる経験、できるようになる成功体験が自己肯定感を生み、A児の自信になっていくと考える。

【事例2】 「おかしやさん」(4歳児11月)

園庭で秋の宝物探しや自然物を使った製作などを通して自然物への興味関心が深まっていた。A児はお椀に砂を押し固め、その上に畑でとった千日紅や分類された秋の自然物を二個ずつ指でつまみ丁寧に飾ってごちそうをつくると、保育者に「食べていいよ！」と持ってきた。「すごくおいしそう！トッピングも可愛い！」と言うとA児は「もっとつくるからまた食べてね。」とさらにごちそうづくりを続け、千日紅をほぐしたり、葉っぱをちぎったりして飾り方をアレンジする姿が見られた。つくったごちそうを毎日大切に保管し、遊ぶ時にはまた机に並べて、ごちそうはどんどん増えていった。クラスの子とも達と遊びの振り返りを行う中で、机に並べていたごちそうを見せているとA児から「誰かに食べに来てほしい」という声が出た。翌日B児が、以前5歳児が看板を出しておかしやさんをしていたことを思い出し、看板をつくり始めた。興味をもつ



砂を固めようと手のひらで押さえ力加減を調整したり、自然物をつまむ、ほぐす、ちぎるなどして指先を使ったりする。

保育者にごちそうをほめてもらったことで、飾り方を工夫してもっとつくりたい。

このごちそうを誰かに食べてもらいたい。

おかしやさんにしたら、みんな食べに来てくれるから、看板をつくらう。

た他の友達も集まってきて、おかしやさんをする事になった。「ここはキッチンにしよう!」「看板はここに置くね。」「お客さんが座る椅子もいるなあ。」とアイディアを出しながら椅子や机を運び、おかしやさんが完成した。A児も嬉しそうに、ごちそうを並べていた。



“おかしやさん”のイメージを友達と共有し、もっとおかしやさんらしくしたい。

遊びに必要なものを自分たちでつくったり用具を運んだりしている。

<考察>

- 子ども達が使いやすいように秋の自然物を分類して砂場の近くに置き、環境を整えたことから、自然物への興味が深まり、それらの様々な素材を使って「色々なごちそうをつくりたい」と、意欲がわいてきた。友達や異年齢児に刺激を受けたり、保育者にしたいことを十分に認められたりすることで、安心して自分の思いを伝え、友達の思いを聞きながら「おかしやさんをする」というイメージを友達同士で共有し、遊びが広がっていったと考える。
- これまでに自然物を使って遊ぶ経験を重ねてきたことにより、どんぐり等の小さな物を指でつまんで乗せたり、千日紅をほぐして使う工夫や押し固めた砂が崩れないように力加減を調節したりしながら、指先を使って遊ぶ姿が見られるようになってきた。

【事例3】 「サーキット遊び」(5歳児11月)

「今日は高いコースにしよう!」と友達と誘い合ってサーキットをつくり始めた。「誰か手伝って」「これ(巧技台の上)を下に置いたら棒が動かなくなるで」と協力しながら組み立てていたA児達。完成すると、嬉しそうに取り組む姿や、怖いけどやってみようと挑戦する姿が見られた。



友達とお互いの動きやタイミングを合わせて運動用具を運ぶ。

自分達が挑戦してみたいコースをつくらう



そこへ「入れて!」とたくさん子ども達がやってきた。「人がいっぱい進まへんな」と困ったA児が一人で体育倉庫に向かった。保育者が「新しいコースをつくるの?」と尋ねると、A児は「横にもつけたらいろんな所からいけて人がいっぱいにならんやろ?」と答えた。「なるほど、いいね!」とA児の様子を見守ることにした。A児の様子を見た数名の子ども達が「こっち持つよ」「ここに繋げるのはどう?」と一緒にコースをつくり始め、四方向から進める新しいコースが出来た。混雑が緩和され、新しいコースを繰り返し楽しんでいった。すると、「ここは山になっているから反対より簡単やな」と巧技台から築山に架けた一本橋の方が、地面



いっぱい進まないから、混雑しないようなコースをつくりたい。

協力や役割分担をしてコースづくりをしよう。

コースの長さや幅を考え、用具を組み立て配置する。

からかけるよりも傾斜が緩やかであることに気づいた。高低差のあるコースに合わせて自分なりに登り方(体の使い方)を調整しながら、何度も挑戦していた。

一本橋やはしごの上でバランスを保とうと体の動きを調整する。

【考察】

- ・様々な運動用具を組み合わせることで、一本橋やはしごから落ちないように四つ這いで進んだり、バランスを取ったりする姿がみられた。また遊びの中で自分なりに体の使い方を考えながら、多様な動きに挑戦することができた。
- ・友達と共通の目的をもち、互いに考えを出し合いながら試行錯誤してできたコースに挑戦し、傾斜の角度で難易度が違ったり、橋を架ける場所によって高低差が変わったりするなどの、新たな気づきがあった。また自分達の考えを実現させていくことで達成感やおもしろさを感じ、遊びを創造していく意欲につながった。

5. 研究の成果

- ・遊びや生活の中での子どもの動きに着目したことから、子ども達が多様な動きを経験し、体の使い方を獲得していることに気づく機会となった。そこで、子どもの興味を探りながら学年ごとで発達段階に合わせたチャレンジカードを作成した。スモールステップで目標を考えたことで自分なりのめあてをもって意欲的にチャレンジし、成功体験を積み重ねることができた。
- ・保育者に見守られ共感してもらうことにより、3歳児は安心して活動に取り組むことができ、4歳児は今までの経験したことを土台とし、自分の思いを言葉や行動で伝えながら遊びを進めていく姿が見られた。5歳児は、友達とこれまでの知識や経験を活かして試行錯誤し、共通の目的に向かって自分の役割を発揮しながら遊びを実現していく事ができた。
- ・3学年が同じ時間帯に外遊びを楽しむ中で、それぞれの存在が刺激となり、自分達も「やってみよう、やってみよう」と挑戦したり、イメージを広げたりして遊ぶ姿につながった。また、課題を解決しようとする姿を見守り、一人一人に応じた声掛けや援助をしていくことで、主体的に体を動かす楽しさを感じることができた。子どもがやってみようと思えるような環境構成を行ったからこそ、心が揺さぶられて動き、生き生きと遊びに取り組む姿につながった。

6. 今後の課題

- ・様々な遊びの中で、子どもたちがどのような体の使い方をしているのかを知ることができた。まだ自分の体をうまくコントロールしにくい子どもが多く、生活や遊びの中で体幹の弱さや不器用さを感じることも多い。物的、人的などの様々な環境条件を相互に関連させながら、幼児期の心身の発達に必要な経験を積んでいくことができるよう、今後さらに保育内容や遊びの工夫をしていきたい。